

よ」と云うを、漢語の「頂戴」御覽に言い變えて、命令にしたままでのものである、又、「いたゞかせて頂戴」など、願う意の敬語ともする。

### 形容詞

【一五一】形容詞の活用わ、次のように、文話と口語と變わつて居る。

#### 第一種活用

高く	高し	高き	高けれ	文語
高く	高い	高い	高けれ	口語

#### 第二種活用

嬉しく	嬉し	嬉しき	嬉しけれ	文語
嬉しく	嬉しい	嬉しい	嬉しけれ	口語

「高し」「高き」の、「高い」となつたのわ、「し」きの子音が黙だまつて、母韻ばかりとなつたの  
で、「嬉しき」の、「嬉しい」となつたのも、同じことである、又、「嬉し」の、「嬉しい」となつた  
のわ、連體形が、終止形を兼ねるのであるのわ、(或わ「し」の韻を引くのか)口語が、か  
ように變わつて居るのわ、日本全國、すべて、同じである。

文語でわ、上に、「こそ」の掛りがあれば「高けれ」「嬉しけれ」と結ぶのを、通則とす

ように變わつて居るのわ、日本全國すべて同じである。

文語でわ、上に、「こそ」の掛りがあれば「高けれ」嬉しけれ」と結ぶのを、通則とするのに、奈良朝から前にわ、日本書紀の仁徳紀に「衣こそ、二重も豫者」。(善き)同、天智紀に「鮎こそは、島邊も曳岐」。(善き)萬葉集、六に「宜しこそ、見る人毎に、語りつぎ、偲び家良思吉」。(けらしきわ、けるらしき)の約まつたので、助動詞であるが、同じことである、同、十一に「己が妻こそ、常目頼次吉」。(常に愛らしき)同、十一に「最今こそ、戀は爲べ無寸」。(同、十二に「玉釧、巻き寝し妹も、あらばこそ、夜の長けくも、歡有倍吉」。(同、十七に「野を廣み、草こそ之既吉」。(繁き)など、あるように、専ら「きしき」で結んで「けれしけれ」の活用わ無かつた、但し、萬葉集、五に「己が身し、勞斯計禮婆、同書、八に、約めて、戀之家婆、形見にせむと、」など、も、稀に見える、是れわ「いたはしくあれば」の「しくあれ」が「しかれ」と約まつて、又「しけれ」と轉じたものらしく、是れが、平安朝になつて、廣く用いられて、遂に「けれしけれ」の活用となつたものと思われる。

○形容詞の語根わ、種々に用いられる。

終止形に用いられるのわ、

おゝ寒

おゝ熱

あゝ痛

名詞に用いられるのわ、

長の暇 高が知れぬ

女子の名に、

高近久

二つ重なるもの、

遠淺 薄赤 高低 久々の對面 近々の事

男子の名に、

清高 重遠 近長

他の語と熟語となるもの、下に用いるのわ、

待遠 面長 身重 事多 夜寒 叢濃

上に用いるのわ、

遠路 長袖 高笑い 長生き 早咲き

嬉し涙 新らし物 怪し火 久し振

形容詞の上に用いるのわ、

細長い 薄暗い 面白おかしく

動詞の上に用いるのわ、

細長い

薄暗い

面白おかしく

動詞の上に用いるのわ、

長引く 遠退く 多すぎる 好すぎる 涼すぎる

接尾辭を下に伴うものわ、

遠さ 痛さ 嬉しさ いそがしさ

寒け 憎げ 卑しげ

高み 厚み をかしみ

面白そうに 嬉しそうだ

「好無」に「そう」を添える時わ、間に「さ」を入れる。

よさそうに なさそうだ

室町時代の孟子抄、一、三一 「大<sup>オホ</sup>晚<sup>ユラダチ</sup>立ガシテ、サウアレバ、此間、カレ伏タ苗ガ、

心ヨサウニナルゾ。同、一、三九 「別ニ願フ事モナサウナガ、不審ニ候」。同、

十四、三 「革車、云々、虎ノ様ナケナゲ者ガ、三百人有ゾ、三百人ト云ガ、ヨサウ

ナゾ。」江戸時代、醒睡笑、四、「あのひとのことであらうづれ、勿體なさうにと、

同、四、「それやうに、あいだてなさうに、物はいはぬものぢや」。など、古くわ「さ

を入れぬも見えるが、室町時代、狂言記、栲山伏、美事な栲、云々、どれに致さう

【二五一】 形容詞の語根 よさそう なさそう

ず、いや、これがよささうな。同、末廣がり、あれから、つゝとあれまで、中よささうに、軒と軒と建並べた。同、宗論「あれへ、よささうなる道連がゆかるる。」江戸時代、醒睡笑、六、「さなくとも、常の事にてはなささうなり。」後撰夷曲集、八、「それづくに、心をよせて、釣針の、いとまさながら、なささうな歌。など、」さを入れてもある、後の六一六の接尾辭の「そうを見合わせよ。

又、稀に、動詞にも續けて、「愛敬が無さ過ぎる。」など、も用いる。

又、打消の助動詞の「ない」にわ、その語根の「な」から、「出來なそうに」つまらなそうだ「勝てなそう」で「など」なるのを、「出來なさそう」つまらなさそう「勝てなさそう」など、云うことがあるのわ、形容詞の「無さそう」の用法に釣込まれるのである、又「穢きたなそう」「危あぶなそう」「なわ」「きたない」「あぶない」の語根で、「無い」の意味も、打消の意味もないのに、「きたなさそう」「あぶなさそう」など、云うわ、全くの誤であらう。

○種々の語を、形容詞にすること、

重々しい　　軽々しい　　痛々しい

「待遠い」を、「待遠しい」とも用いるは、珍しい。

馴れくしい

晴れくしい

「待遠い」を「待遠しい」とも用いるは、珍しい。

馴れくしい 晴れくしい

物々しい 事々しい 花々しい

鬱陶しい 美々しい 福々しい 毒々しい 騒々しい

凜々しい 仰々しい 餘所々々しい ばかぐくしい

黄色い 四角い 面倒い

○「同じい」と云う形容詞を「同じ物同じ年同じ」であるなど、語根でばかり用いられ、又「ん」を加えて、「おんなじ人」なども云い、「じ」を母韻ばかりにして、「おない年」なども云う、又「兄も勉強する、弟も同じく勉強する。」など、其第一活用を、副詞に用いることもある。

狭衣、二、只大將の御おなじかほにて、

【一五二】「好い」の終止形連體形を「えい」とも云うのわ、全國殆ど混用である、(京都わ「よいえ」、大阪わ「えい」、え、「い」は、東京府、埼玉縣、千葉縣、茨城縣、神奈川縣、静岡縣、山梨縣、長野縣で云い、尙、越後、三河、福井縣、香川縣の大川郡、因幡、福岡縣、大分縣でも云い、宮崎縣に多く、沖繩縣もそうである、そうして、大抵「よいえい」を混用して居る、殊に、中國の西部、四國、九州の半わ「えい」である、又「えい」を「えい」

【一五二】形容詞の「よい」「えい」「え」「い」

と云う所が多い。(天智紀、二十の「曳岐」又わ「日吉住吉」などの「え」も「よ」である)  
○「よい」の「えい」いゝと變わつて居るもの(「ゑ」とあるも「え」である)

平安朝時代

類聚名義抄、言部、善、エ

室町時代

史記抄、三、三 今時ノ人、文章モ詩モ、エイト云テ、云々、 同、三、二〇 へタノ

カク文章ガ、云々、此等ハエイトノ事ヲ、チャツノト取テカイタゾ。 同、

十五、二三 如此傳ヲ立ル中ニ、六經ヲエイト沙汰シテ、見セタゾ。

狂言記、聲貫、 父様何爲に往にませうぞ、おう、したらゑいわ。 同、宗論、 先

づ、念佛しゆ致したがゑい。

江戸時代

犬子集、春、上、 梅はたゞいゝ木の花か、あはせ香。連一(畿内邊の人)

淋敷座之慰、江戸まんざい、 たかき屋に、上りて見れば、いゝ煙、民のかまど

は、にぎはひにける。

雑兵物語、上、沓持、 馬、云々、夜も立ちづめて、ふらせないがゑいひぞ。 同、下、荷

宰料、 煮てくらつたも、ゑいもんだ。

【一五五】夜が長くあるを、ゑいもんだ。

雜兵物語、上、沓持、馬、云々、夜も立ちづめて、ふらせないがゑひぞ。同、下、荷

宰料、煮てくらつたも、ゑいもんだ。

【一五五】「夜が長くある」それわよくない「物がなくなる」など、用いるのわ、連用形である、間に、助詞の「わ」も「を」加えて、「夜が長くわある」それわよくもない「など、も用いる。」

○「日が長く退屈する」嬉しくてたまらないなど、云うのわ「長くあつて嬉しくあつて」と云うのを略して云うのであらう。

これを「長くツて嬉しくツて」とも云うが、用いぬがよからう、雜兵物語、下、矢箱持、昨日、いすてた箭も、つかんでみるに、根の込入がゆるくつて、矢と根と、二ツに成てこぼれた。同、又、馬取、彦八、數を多く引付ければ、夫れもいひづらくつて、わるいもんだ。

【一五六】「くあが、か」とつゝまるのである。

○鎌倉時代

平家物語、九、老馬の事、足立のよからう方へむかはう。

室町時代

史記抄、五、三八 威勢ガ、イカメシカツタゾ。同、六、一八 劉季ト書タラバ、

【一五五】 【一五六】 形容詞の第二活用形 かつた かるう 一五



ヨカリサウナヲ、同、六、二七 人々、自、堅カラウト云タボドニ、同、八、三

一 穀米ノヨキコソ、靈芝ヨト云タ天子アリ、徽宗ノ時分ニ、ツヨク多カ

ツタゾ。同、十、二七 齊ノヨワカツタ事ゾ。同、十一、二九 信陵君ガ、我

ガ父ノ讎ヲ報テクレウハ、ヤスカラウズニ、報テクレヨカシト云テ、同、

十一、九八 陳涉バカリ、王ニナツタラバ、天下ノ人ガ、モノグサカラウ。

孟子抄、一、九 句ノ如クニ心得タラバ、ワルカラウゾ。同、一、一二 諡ハ、古

ハ、ナカツタ。同、四、一三 孟子ノ、母ノ喪ノ事ニ、イソガシカツタ程ニ、ト

云心ゾ。

閑吟集、見ずば、たゞよからう、見ざりやこそ、物を思へ、たゞい。

狂言記、柿山伏、そのづれな事を云ふならば、爲にわるからうぞよ。同、ひ

め糊、この様な物ではなかつた。同、二千石、さう云う者に、何が惜し

からうぞ。同、佛師、餘り高う作つて、此様にして拜むも、腰が痛からう。

狂言記、烏帽子折、これは、映え合ふてよかる。

伊曾保物語、甘い物を喰うた上なれば、何かはよからう。

江戸時代

昨日は今日の物語、此まじない、ちとおそくば、あぶなかつたが、さりとして

は、天下一程ある。

伊曾保物語、甘い物を喰うた上なれば、何かはよからう。  
江戸時代

昨日は今日の物語、此まじない、ちとおそくば、あぶなかつたが、さりとは、天下一程ある。

醒睡笑、一、鼠が着た物をふまば、むさからふ。同、六、雷、酔をくうた人、云々、味は、あまいか、すいか、と問ふに、ちと、雲くさかつた。

東海道名所記、六、心の内に、うら山しからう、といへば、

古今夷曲集、五、三日月の、影ますやうに、明日よりは、猶よからうと、いはふ春かな。

後撰夷曲集、五、君が代は、ほにほがなりて、年々に、めでたからふよ、久しからふよ。

諸國盆踊唱歌、大和、わかいせなごの、ぐわんかけるのは、神や佛も、おかしかる。同、和泉、つきようたてや、やみならよかる、またぬまにきて、かどにたつ。同、攝津、ことし世がようて、ほにほがさいて、とのも百姓も、うれしかる。

雑兵物語、上、草履取、乗た馬に、切先を切付て、手負馬がおほかつた。同、挾箱持、おれが脇差の柄は、お江戸を出る時、あたらしかつたが、毎日々々、

【二五六】 形容詞の第二活用形 かつた かるう

手袋の金物にあたつて、そのまま、柄糸が切れた。

「少からぬ手當けしからぬ話」よろしからぬ事だ「悪しからず思召せ」遠からず参りましようなど云うも、是れである、それからして、「よかれあしかれ、しかたがない、遅かれ早かれ、出来るのだ」など、命令の形で、そのまま、でまゝよの意に用い、又「とかく世間に事なかれ」など、眞の命令の意に云うこともあるが、是等わ、文語の残つて居るので、多くわない。

又「無理からぬ話だ」など、云う言葉をつかう人もあるが、大きな間違で、「無理ならぬ」と云わねばならぬ、「よかりそうに」なかりそう「だ」と云ふ言い方もあるが、(前に記した史記抄の例に、一ツ見える)東京でわ、「よさそうに」なさそう「だ」と云う。

【一五七】「く」の、「う」となるわ、「く」の子音を言わないで、母韻の「う」ばかり言うのである、第一種活用にわ、「ようこそお出でになりました」お暑うございませう「お寒うございませう」お心安うねがいます、第二種活用にわ、「よろしう召しあがれ」おいそがしういらつしやいませう「うれしう思います」めづらしう拜見しましたなど云う。

阿段の音を、於段に變えるのわ、「あぶのう(なく)ございませう」ありがとう(たく)存

しました「など云う。

阿段の音を、於段に變えるのわ、あぶのう（なく）ございます「ありがとう（たく）存  
じます「おはよう（やく）お歸りなさい「日（が）なごう（がく）ございます、「などである。  
又、下の語を略して、「御機嫌よう」「御機嫌よろしう」「おめでとう」「おはよう」ありが  
と「など、言切ることがある。

此「く」を「う」と云うわ、東京でわ、丁寧な物言いの時に限つて、「疾（き）う」に行つた「疾（き）う」  
から知つて居る「などわ、例外である、其外わ、すべて「く」と云う、丁寧に云う場合  
に限つて、「う」を遣うのわ、丁寧な物言いにわ、古く上方（かみ）方言言葉を遣つて居た名残  
であろう。

○「よく」なる「長く」かゝる「嬉しく」思う「新しく」作る「よくて」嬉しく「など、文語  
のまゝに、「く」と發音するは、關東、奥羽、松前、静岡縣、山梨縣、長野縣と、越後の一部  
であつて、尙、佐賀縣の唐津、宮崎縣の延岡、其外、諸處でも云い、そうして、沖繩縣  
でも「く」と云う、其外、愛知縣、岐阜縣、富山縣、越後の一部から、西は九州まで、すべ  
て、「よう」なる「長う」かゝる「嬉しう」思う「新しう」作る「よう」て「嬉しう」てであるが、愛  
知縣、富山縣、出雲、高知縣に、「く」をませて云う所がある、因て初わ、兩立させるよ  
うに案を立てたが、決議の末に、「く」とすることゝなつた。

【二五七】

形容詞の第二活用形「く」を「う」と云うこと

武藏の川越で、ようなる「嬉しう」思う」と云い、愛知縣、富山縣、京都、大阪、丹後、宮崎縣、鹿兒島縣に、「くも」も云わず、「長なる」寒なる「宜ない」など、云う所がある。又、「ようして」嬉しうして」と云う所が、福岡縣、肥前、熊本縣、宮崎縣にある。

○「く」の、「う」となつたもの、「ふ」とあるも、「う」である。

平安朝時代

類聚名義抄、媚、ウツクシウス、分、ヒトシウス、崇、タカウス、

竹取物語、うつくしうおはするにて知りぬ。

宇津保物語、樓の上、いとちいさくて、かしこうまふもの哉。同、初秋、ね

たうも、まけ奉りぬる哉。

蜻蛉日記、下、びいしうもてなし給ふとか、世にいふめる。

神樂歌、早歌、最將、奈加宇天、長くて、

源氏物語、桐壺、いかめしう、その作法したるに、同、帚木、いみじう、みぞ

れ降る夜、同、夕顔、風あらくしう吹きたるは、

枕草子、五、只夢のこゝちし、あさましうあやなし。

成唯識論、(石山寺藏、後一條帝、寛仁四年) 命短

後拾遺集、戀、三、かれくなるをよこの、おぼつかなくいひたりけるに、

成唯識論(石山寺藏、後一條帝、寛仁四年) 命短カウ

後拾遺集、戀三、かれくなるをとこの、おぼつかなういひたりけるに、

大慈恩寺三藏法師傳(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年) 健ツヨウシテ

今昔物語、二十九、伯耆國府藏入盜人被<sup>コホサ</sup>致語、然ルハ、痛ウ云タル奴ナレバ

可<sup>ミ</sup>免放<sup>キニ</sup>、口惜キ態シタリ。同二十九、九條堀河住女<sup>コホサ</sup>致語、夫哭語、早ウ

此女ハ、密夫ト心ヲ合セテ、實ノ夫ヲ<sup>コホサ</sup>致シテケル也ケリ。

童蒙頌韻、蒙、クラウシテ、聰、サトウシテ、窮、マヅシウシテ、嬉、ウルハ

シウシテ、端、タマシウシテ、

金葉集、雜、上、いかに、心もとなうおぼすらむ。

梁塵秘抄、二、二句神哥、こひしくば、とうくおはせ。

### 鎌倉時代

新古今集、十四、はやう物申しける女に、かれたる葵を、みあれの日遣しける、

平家物語、一、禿童の事、しゆくびやう、たちどころにいへて、天命をまつた

うす。同、一、妓王の事、たうじ、めでたうさかへさせ給ふ平家太政の入

道殿、同、七、實盛最後の事、心は<sup>たけ</sup>猛う進めども、やさしうも申したり、

【二五七】 形容詞の第二活用形 「くをう」と云うこと

定家假名遣 おだしう、穩、むくつけう、蠢、心うつくしう、心嚴、うれし

う、嬉、あぢきなう、無常、すげなう、無人望、からうじて、辛、

遊仙窟 遙、トヲフシテ、險峻、サカシフシテ、拙、ツタナフシテ、

字鏡集 凄、サムウシテ、混、オナジウシテ、粗、アラウシテ、

古今著聞集、三、屏風は、うるはしうひきのべつれば、同、六、誰人ならん

と、人々、あやしう思ひあへるに、

砂石集、二、汝、人間ニ生ジテ、思出モナフシテ、命ヲ失ン事モ不便ナレバ、

假名論語、季氏篇、いま、それ、せんゆ、かたうして、ひにちかし。(今夫顛與、固

而近於費) 同、子路篇、かならず、な、たゞしうせんか。(必也正名乎)

南北朝時代

平他字類抄、周、アマチウ、

室町時代

義經記、土佐房、義經の討手に上る事、まづ、めづらしう候江田殿近うまい

れと、めしけれども、同、義經都落、判官、いしうも申たる者かな。

曾我物語、吳越の戦の事、智ふかうして、才たかき事、「いよく、心をむつま

じうし給ひけり。」死をかるうしてたゝかふ。

曾我物語、吳越の戦の事、智ふかうして、才たかき事、いよく、心をむつま

じうし給ひけり。死をかるうしてたゝかふ。

幸若、百合若、蒼天、廣う遠うして、月の出づべき山もなし。同、硫黄が島、

執行が事においては全う淨海は知るべからず。

史記抄、六、六六 呂后ノ性ガコワウテ、女ノ様ニモナイゾ。同、八、四一 山

ガ、ヒキウチイサウテ、同、十、一九 物ノヨイワルイ事ヲ、ヨウセウズカ、

ワルウセウズカヲ辨ズル事ノ難ト云ハ、

孟子抄、一、一九 毛色モ、ウツクシウウルハシウテ、禽獸モ遊ゾ。同、一、二九

省ハ、刑ヲウスウカロクスル事ゾ。

人國記、山城國、城州ハ、其水潔フシテ、萬色ヲ染ケルニ、

守武千句、あふぎに似たる、もちいなりけり、あぢきなや、何故いたう、こが

すらん。

運歩色葉集(甲) 強、シウ子ウ、

元龜字叢、浚、フカフスル、

狂言記、墨塗、わらはを、うるさう思召して、同、宗論、連れ欲しうて、こゝ

に休らふて居ました。苦しうなくば、御供いたしませう。同、相合袴、

【二五七】 形容詞の第二活用形 「くをう」と云うこと



めでたう、智殿の立姿、見たうござる。同、拔殻、此様に、お氣をつけられ  
ますを、傍輩共も、いかう、けなりう(羨ましく)思ひまする。

伊曾保物語、側近う使はるゝ二人の小姓、大きな荷、云々、これは、當時、重く  
とも、やがて、輕うなるものぢや。

## 江戸時代

昨日は今日の物語、どこらが、いとう御座る、ととひければ、おびしより下  
がいたい、といふ。

徒然草抄、上、イカヤウニ、ソシリワルウイハウトモ、クルシカラヌ也。

倭玉篇、乙、媚、ウツクシウス、嘔、ムツマジウス、快、タクマシウ、

醒睡笑、三、作意ある人のかふ犬あり、名を二十四とつけたり、云々、何とし  
たる子細にやととふ、しろく候は、さてく、げにもく、とかんじ、家に歸  
り、しろ犬をもとめ、二十四とよぶ、いかなる心持ぞとたづねられ、しろう  
候ぞ。同、五、東の奥より、都にのぼりたる人あり、さる古寺に立寄り、院  
主に參會し、云々、お茶をもみぢにたてよ、とありしを、客、何たる仔細にや  
と問ふ、たゞ、こうように、といふ事なり、とあり、おもしろきことの葉や、と

おぼえつゝ、本國に歸り、云々、お茶をもみぢにたて申せ、とあり、人々、事の

と問ふ、たゞ、こうように、といふ事なり、とあり、おもしろきことの葉や、と

おぼえつゝ、本國に歸り、云々、お茶をもみぢにたて申せ、とあり、人々、事の趣をうかひひたれば、こくよくたて申せ、といふ言葉よ。

太閤記、二、何となふ、物悲しうぞ覺えたる。同、三、年わかうして、勇がちなる人々は、

犬子集、七、春、有がたう、ひらけ初る、比叡山。同、十六、魚鳥、鶏や、さむうてやねに、のぼるらん。

正章千句、一、鶯、左義長を、夥しうも、はやしたて、同、六、七夕、まつ黒雲に月ほそ、う見ゆ。同、七、秋螢、胡蝶は春の、雪によう似た。

をぐりの判官、一、うつくしうした、めたる文、一つう、同、二、三郎殿の御出、しう着申て候と、安うりやうでうなされける。

諸國盆踊唱歌、三河、さまの心は、なせうすうなる、こゝはやつはし、かきつばた。同、肥後、よいにみそめた、しらはのむすめ、ようもなりそな、うりのつる。

諸國盆踊唱歌、和泉、ひとはわるない、わが身がわるい、やぶれぐるま  
で、わがわるい。同、志摩、思ひきらしやれ、もうなかしやんな、さまの

戀ぢは、うすござる。同、美作、近江の笠は、なりがようてきよて、しめ  
 をがながうて、きよござる。同、讃岐、みすじふろが谷、朝さむござる、  
 こたつやりましたよ、炭そへて。

合類節用集 緩、ユルフス、同、ヲナジウス、

○「無くて無くなる」などの「く」を「う」としたのわ、室町時代、狂言記、釣り女に、「妻  
 ではなうて、何やら、竹の先に、繩がつけてある。」江戸時代、醒睡笑、六に、「伊勢  
 の國をのぞきたる事もなうて、いくたびも、參宮したるよしをはなす者あ  
 り。」犬子集、一、春、上に、「聲なうて、人よぶ梅の、にほひ哉。」同、十五、雜、下に、「氏な  
 うて、關白迄やあがるらん。」古今夷曲集、六に、「旅衣、たちぬる寺に、茶はなう  
 て、のみてこそゆけ、さゆの中山。」後撰夷曲集、二に、「吉野なる、かやのおが屑、  
 ふすぶれば、かもなうなりし、山かげの庵。」など、見える、しかし、これを、發音  
 のまゝに書けば、「のうて」のうなる」となつて、語根まで變わることゝなる。

【一五八】「遠くをながめる」わ、「遠くある所を、近くえ移る」わ、「近くある所え、多く  
 の寶」わ、「多くある所の、おそくまで、はたらく」わ、「遅くある時」を略したのである、  
 う、「遠くの親類、近くの他人、疾くの昔」全くの誤などゝも云う。

【一六〇】第一種形容詞の文語の終止形の「し」「い」となつたものわ、「ひ」とある

う、遠くの親類、近くの他人、疾くの昔、全くの誤など、も云う。

【一六〇】第一種形容詞の文語の終止形の「し」「い」となつたものわ、「ひ」とあるも、「い」である。

鎌倉時代

平家物語、五本、(延慶本)宇治川合戦、嫉あはイ、サラバ、景季モ竊ムベカリケルヲ

トテ、云々、

定家假名遣 さがなひ、無惡、いさぎよひ、潔、

室町時代

幸若、笈さがし、宿しゆくに着きぬれば、腰が痛い、なんどとて、

史記抄、二、六二 東夷ガ平デ、メデタイトテ、來賀スルゾ。同、五、三〇 イヤ

く、コワイト云テ、其ヨリ後ハ、見相モセラレヌゾ。同、六、五三 且ハ、ナ

サケナイトモ云ヘキゾ。同、十、三三 疽ヲ吮ワレタレバ、アリガタイト

云テ、一命ヲ棄テ、同、十、七五 齊ノ君ヲ、ワルイト云ワウ用ゾ。

孟子抄、一、二 是ヲ以テ、非魯ニ云ガヨイト云ヘ共、貌バカリデハ無イ、瑞

相ガ有テ、聖人ノ心ガ有タゾ。同、一、三一 政ヲセウモノハ、人ヲ刑罰セ

イデハ、カナハネドモ、殺ストモ、カナシフテ、カワイ、ト思フモノガ、是ヲ

【二五八】 【二六〇】第一種形容詞の終止形の「し」「い」となつたもの一七七

一ニセウゾ。

閑吟集、 罽の中へ、身をなげばやと思へど、底の邪(蛇か)がこわい。

異本節用集、 辱、ツタナイ、 麩、フトイ、 聰、サトイ、 廁、キタナイ、

狂言記、宗論、 其方の宗體を、世間で、情が強いといふ。「只、南無阿彌陀佛と

さへ唱ふれば、決定往生、疑ひが無い。同、栴山伏、 栴、云々、先、たべて見や

う、さればこそ濫い。「先かうして置いたがよい。同、烏帽子折、 汝等、忘

れたは憎けれども、噓事が面白い。同、薩摩守、 あゝあぶない、こなたは、

終に船に乗た事がない、と見えた。

節用集(丙) 麩、フトイ、

詠歌之大概、 秋の露、たもとにいたく、結ぶらん、いたくとは、事外と云心也、

事外、身にいたいと云也。

江戸時代

昨日は今日の物語、 世には、あぶない事がおほい。「けさも、とつくりをふ

つて見て、酒がないとて、さけのみを参りて、今に、かほがあかい、と申た。「

さて、かたじけない、さやうにおぼしめし候へば、生々世々、忘れがた

い。

さてく、かたじけない、さやうにおぼしめし候へば、生々世々、忘れがた

い。

徒然草抄上、平生無嗜ナレバ、ワルイト云心也。

醒睡笑四、こしをひく人を見て、そなたの足は、つれに、片足みじかい、と問

ふてあれば、いや、かたあし、人のよりもながいといふた。同六、あ、聲が

たかい、ひきうくといふ。同七、能を見に行き、云々、津のくに高砂の

浦をも、一見せばやと存じ候、といひければ、云々、今の人は、一間せばい、と

いうたは、おもしろい。同八、こなたのお仕合は、残る所なし、何事もお

めでたい。

かたこと、二、何のへんもなひ、といふことを、へんてつもなきといふは、く

るしからぬ言葉にや。

諸國盆踊唱歌、山城、いとまくだされ、後日はまたぬ、あすはくる日で、ひが

わるい。同、和泉、もみぢふむしか、にくいといへど、こいのふみかく、ふ

でとなる。同、遠江、忍んしうはままつ、ひろいようでせまい、よこにく

るまが、二てうたぬ。同、薩摩、志賀からさきの、名はよけれ、一つまつ

とは、きくさへつらい。

淋敷座之慰のほゝんぶし、小紫とは、誰名を付た、色にそみては、うへがな  
い。

○第二種形容詞の終止形の「し」「しい」となつたものわ、  
鎌倉時代

定家假名遣、ゆゝしい、世にすぐれたる心なり。

字鏡集、澇ウツクシイ、

室町時代

塙囊抄、二、指過たる事を、ギョウクシキト云は、何れの字を可用ぞ、業々  
とすべき歟。

孟子抄、一、二六 穆公モ、アサマシイ、カウ遺言シタゾ。

閑吟集、いとおしいといふたら、かなはふず事か、明日は又讚岐へ、下る哉。

運歩色葉集(甲) 寒、スサマジイ、

異本節用集、巖、ケハシイ、 岨、サガシイ、

狂言記、釣狐、おう嬉しい、是れもそなたの爲ぢやぞや。 同、宗論、あゝ穢

らはしい、何と致さう。「あゝ喧しい、何事ぢや。 同、二千石、故もないに、

成敗したとあつては、後難が口惜しい。 同、胸つき、二三日と云ふても、

狂言記 鈴狢 おう嬉しい是れもそなたの爲ぢやそや 同宗論 おい、種  
らはしい何と致さう。あ、喧しい何事ぢや。同、二千石、故もないに、

成敗したとあつては、後難が口惜しい。同、胸つき、二三日と云ふても、  
又、延々になれば悪い、どうあつても、今日は、是非とも同道する。同、墨  
塗、太郎冠者か、よそくしい。同、靱猿、猿きやあ、わ、しくば、わ  
しいと、初からおしやつたがようおりやる。

江戸時代

倭玉篇(乙) 倚、タノモシイ、 熹、ウレシイ、 欲、ホシイ、

醒睡笑、五、 思ひいだしたれば、をかしいと申した。同、六、 餅をくひ過し  
て、むねのやくるがくるしい。同、七、 我は、た、生れつきたる兩眼の外  
に、目を、三つほしい。

後撰夷曲集、九、 棕橋の里にて、世におもき虚勞の病をいやせるを見て、か  
く申遣し侍りける、うらめしい、どうともならぬ、煩がなほれば繋ぐ、馬の  
くらはし。

卜養狂歌集、下、 たまはりし、木地三つぐみの、ぬりものは、うるしい、か  
たぢうけない。

諸國盆踊唱歌、大和、 はやるかんざし、かみかたちより、すぐな心が、うつく

【一六〇】 第二種形容詞の終止形の「し」「しい」となつたもの 二二



しい。同、河内、いちやおつるは、よもやすけれど、身より大事の名が  
しい。

○第一種形容詞の終止形を、文語のまゝで用いることがある、それわ、痛し、痒し、帯に短し、襷に長し、丁度よし、勉強するがよし、それならよし、此上なし、構いなし、現金懸直なし、見ぬこと清し、見るものわ、何もなし、さお、よし、く、(赤子の泣くをなぐさめるに)暗さわ暗し、挑燈わなし、氣も輕し、心もよし、旨くいけば面白し、間違つてもおかしくてよし、讀ませれば早し、書かせれば遅し、など云うので、これわ、續後撰集、十七に、第二種でわあるが、人も惜し、人も怨めし、あぢきなく、世を思ふ故に、物思ふ身は、など、ある文語の姿の、まだ残つて居るのである。

室町時代

狂言記、宗論、夜も長し、夜もすがら、宗論をして、云々、

江戸時代

醒睡笑、六、柿のじゆくしたる、四つ五つ、残りあるを、われくはん、たれくはんと、くらひては多し、柿は少し、所詮、年老次第にくはんと云。

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、馬上の敵は、先、馬をはじいて、後に、人を打つが

んとくらひては多し、柿は少し、所詮、年老次第にくはんと云。

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、馬上の敵は、先、馬をはじいて、後に、人を打つがよし。同、下、玉箱持、力もなし、せおひものはおもし、から箱は役にたかず、矢箱の役には、がいにおとつたことだ。

「氣も輕し、辯もよし、面白い人である、など、云うときわ、氣も輕くあるし、辯もよくあるし、(助詞の「四三八」の意味で、中止形のようにつかわれるのである、しかし、是れわ、多くは、氣も輕いし、辯もよいし」とつかわれる。

又、右の終止形を、名詞に用いることがある、「心なし」「父なし」「お心よしの人」よし、あしをきめる「錢なし」でわ、何も出來ぬ、何もごぞんじなしでいらつしやる「まだ案じなし」だが、何とか考えてくれ、又、人名に、「清篤高」など、用いる、又「父なし」「子餠なし」「饅頭」など、名詞と熟語にすることがある。

又、「なし」に、「に」を添えて、副詞句に用いることがある、「遠慮なし」に云う「何となし」に面白い「仕方なし」にする「分けへだてなし」に照らす。

○第二種の形容詞の終止形も、文語のまゝに用いることがある、「お、苦し」それによろし「やれ、嬉し」や、又、人名に用いることもある、「正齊久」。

○又、終止形を「し」とすることがある、それわ「晝わいそがし、夜わねむし、獨

でわ淋し、連れわなし、河豚わ食いたし、命わ惜し、など云うのである。

「品わ欲し、持つて歸るもおかし、どうしたものが、など云うのわ、欲しくもあるし、おかしくもあるし、（助詞の「四三八」の意味で、中止形のようなものである。古くは、第二種形容詞の語尾に、「し」と云う活用わない、中世から出来たものである。）

平安朝時代の初の新撰字鏡（十二卷本）の一の廿五に「僕、太々皮（波志之）、同、十二の廿五に「喜見、彌萬久保志自」など、あるわ、研究ものである。

平安朝時代の末の頃の基俊集に「家苞に、さのみな折りそ、さくら花山の思はむ、ことも恥し、はづかし」とある本もあるそうだ。永長二年、東塔、東谷歌合に「秋深み、夜風烈し、宜しこそ、四方の里人、衣打つなれ。」鎌倉時代の源平盛衰記、祇王祇女に「祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、美しい、と嘆られたり。」同、南都合戦に「折節、風は烈し、炎の本は、一つなりけれども、吹迷ふ風に、多くの伽藍に吹きかけたり。」同、逆艦に「友あらがひ、其詮なし、平家の漏れ聞かむも、をこがまし。」同、（長門本）三位入道入寺に「競は、渡邊黨の其一、王城第一の美男なり、右大將の裏築地の中より、朝夕、出入する、欲し、

欲し、と思はれける、云々。」無住法師の雑談集、三、伏見天皇の頃）に「何物も、

其一、王城第一の美男なり、右大將の裏築地の中より、朝夕出入する、欲し、

欲し、と思はれける、云々。無住法師の雜談集、三、伏見天皇の頃、に、何物も、常に見ゆるは、厭はし、いつも飽かぬは、粥と大乘。など、見える、室町時代からわ、多く見えて、曾我物語、あさまのみかり、笠の内、あやし、と見いれ立のけば、幸若、信田に、あら痛はし、。謠曲、唐船に、それも戀しく、又、これもいとほし、。閑吟集、泣くはわれ、なみだのぬしは、かなし、ぞ。江戸時代、醒睡笑、二、今年より、をし、ほしくの、二心、うすくなりせば、國ぞをさまる。同、二、四條の橋のもとまで、にげきたり、あまりくるし、ちと、子をおろして、やすまんと思ひ、云々、あづまぢの記、夜船にて、宮へ渡らんといへど、風あし、とてゆかず。など、ある、しかし、すべての第二種活用が、こうなると云うでわない、同じ、甚じ、久し、はなはだし、など、わ云わぬ。

○形容詞の活用を、口語でわ、第一種第二種と分けるに及ばぬようでもあるが、語尾の「し」となることもあるわ、第二種活用に限るから、分けて置く必要もある。

【一六一】形容詞、第一種第二種活用の文語の連體形の「きしき」の「いし」となつたものわ、「ひしひ」とあるも、「いし」である。

【一六一】形容詞の連體形の「きしき」の「いし」となつたもの

平安朝時代

類聚名義抄 任、ホシイマ、 假哉、カタイカナ、 善哉、ヨイカナ、

古今集、 典侍、あまねい子、

後撰集、 内侍、たひらけい子、 典侍、あきらけい子、 命婦、きよい子、

和名類聚抄、(下總本)調度部、容飾具、 粉、之路以毛能(白き物) 同、職官部、 大

納言、於保伊毛乃萬宇須豆加佐、 少納言、須奈伊毛乃萬宇之、

孝德紀、三一、 休祥ヨイサカナリ 齊明紀、二、 紺フカイ、ナダ 天智紀、二、 寒極サムイ、キハ、マリテ

蜻蜓日記、 いとやうないことなり。

催馬樂、淺緑、 淺緑や、己以波奈太(濃き花田) 同、無力蛙、 ちから名伊かへ

る、ほね名伊み、ず、(力無き蛙、骨無き蚯蚓)

神樂歌次第、(樂章類語抄) 左ひだりの近ちかい衛府まもりつかさの將監まがりごん、正ただい六むつの位、某、姓名、

源氏物語、乙女、 うちとけず、苦しいことに覺えたり。

紫式部日記、 青い白つるばみのかざみ」はかない詞のにはひも、見え侍

るめり」。にくいことを引出でむぞ、あやしき。

枕草子、九、 からぎぬに、しろいものうつりて、まだらにならんかし。 同、十

二、 からい目を見さぶらひつる。

枕草子、九、からぎぬに、しろいものうつりて、まだらにならんかし。同、十

二、からい目を見さぶらひつる。

更科日記、さすがに、若い人に引かれて、

史記(狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年)安ヤスイコト

榮華物語、もとの雫、かほには、べにしろいものを、つけたらんやうなり。

### 鎌倉時代

藤原隆信朝臣集、戀、四、おもひかけず、にくいけありし人を、うち見やりて、

平家物語、一、妓王の事、家内ふつきして、たのしひ事、なめならず。同、四、

競の事、あつばれ馬や、馬は、まことに、よひ馬で有けり。同、ふじ川の事、

源氏がせいはいか程有ぞ、云々、おほいやらう、すくないやらう、凡七日八

日が間は、はたとつひて、同、九、六箇度合戦の事、きやつ原は、こはひ御

かたきで候。同、九、老馬の事、今や寄するとあひまちて、やすい心もせざ

りけり。さて、なんぢには、子はなひか候とて、熊王とて、生年十八さいに

なりける小冠者を奉る。同、九、濱軍の事、いのちは、おしひ物にて候けり。

定家假名遣、ねたいかな、嫉妬、しろいもの、粉、

遊仙窟、熱、アツイ事、

【二六一】形容詞の連體形の「きしき」の「いしい」となつたもの

砂石集三、邪行ヲホシヒマ、ニシ、自ラ損ジ他ヲ損ジ、

假名論語、季氏篇、すくないことをうれへずして、ひとしからざるをうれ

う。(不患寡而患不均) 同、述而篇、はなはだしひかな、わがをとるへた

る事、久しいかな、わが、又、ゆめに、しうこうを見ざる事、(甚矣、吾衰也、久矣、吾

不復夢見周公) 同、泰伯篇、さいのかたいこと、それしからずや。(才難、不

其然乎)

室町時代

義經記、吉次おうしう物がたりの事、此おさなひ人を見奉りて、あら、うつ

くしの御ちごや。同、へいせんじ御見物の事、太刀を抜、にくいやつば

ら、など申して、とんでおり、

幸若、百合若、何はにつけ、物憂き事の多いぞや。同、烏帽子折、御身がや

うに、なまめいたる若い人を、京藤太とやらんは、見目の美しい者、面白

い名や、同、高館、物の臭い軍かな。

史記抄、六、一五、沛中ノタノシイモノドモガ、ヨリヤウテ、同、六、一七、驚

テ門マデ出迎タハ、ヲカシイゾ。同、六、二七、ツヨク怨メシイゾ。同、六、

三六、此日、樊噲張良ガナクバ、沛公ハアブナイゾ。同、六、六六、ヲソロ

テ門マデ出迎タハ、ヲカシイゾ。同、六、二七 ツヨク怨メシイゾ。同、六、

三六 此日、樊噲張良ガナクバ、沛公ハアブナイゾ。同、六、六六 ヲソロ

シイ人ゾ。同、六、七五 アマリ、イタハシイ事ゾ。

孟子抄、一、三 縦ハ、六國ノ南北ノセバイ處ヲタモツ、東西ノヒロイ秦カラ、

手ワケヲシテ、秦カラ六國ヲ責ムルゾ、是ヲ横ト云。同、一、四 是等ノ色

ハ、ウツクシイゾ。同、一、一四 惣ジテ、手ゴハイ内ノ者ヲ持ツテハ、サテ

ゾ。同、一、三三 サテハ、ヲカシイ事ヂヤヨ。同、一、三四 牛ハ大ニ、羊ハ

チイサイ程ニ、小ニカヘタハ、牛ヲ惜ト云タハ道理ゾ。同、二、五 禁制ノ

法ガ、事ノ外ニキビシイゾ。同、九、二四 微服ト云テ、キタナイ服デイナ

レタゾ。同、十二、二一 餘リニ嬉イ程ニ、夜モネラレヌ程ニ、ウレシイゾ。

犬筑波集、雜、毛のあるないは、さぐりてぞ知る、弟子もたぬ、坊主は髪を、自

剃して。

閑吟集、袖のおもさよ、戀はおもひ物哉。たゞおいて、霜にうたせよ、夜ふ

けて來たが、にくひ程に。みめよひか、かたちもよひか、人だにふらざ、な

をよからう。にくげに、めさるれども、いとおしひよなふ。

守武千句、おさないに、をはらこからや、のますらん。

【二六一】

形容詞の連體形の「きしき」の「いしい」となつたもの



運歩色葉集(甲) 白物ヲシロイ、

元龜字叢、 庵、タカイ、エ、

狂言記、釣狐、 狐など、いふものは、執心深い物で、  
 「のうおそろしい事の、  
 やすい事、御目にかけてませう。」  
 氣味のわるい物、  
 「人間といふものは、か  
 しこいものじや。」  
 同、宗論、 甲斐の身延程、ありがたい處はござらぬ。  
 よい連れが欲しい事ぢや。」  
 いや、これへ、似合はしい者がまゐる。」  
 其法  
 然とやらが生臭い珠數は、いやぢや。」  
 あ、げがらはしい事かな。」  
 その  
 様な情の強い珠數は、戴きたうもおりない。」  
 夥しい事を投げ出した。  
 同、萩大名、 今日は何方へぞ、珍しい處へ行きたいものぢや。」  
 亭主が所  
 望するならば、恥かしい事ぢやが、一つ二つ、謠はうまでよ。」  
 その様なむ  
 づかしい所ならば、行くまいまでよ。」  
 それは、にがくしい事でござる。  
 同、聲貫、 這入りませいで、よそくしいありさまな。  
 同、伯母酒、 よい  
 酒か、惡しい酒か、私が、きいて見ずばなりますまい。」  
 酒、云々、甘いをすい  
 てまゐる衆もござり、又、辛いをすく衆もござる。

伊曾保物語、 なまぬるい湯を、一杯、大茶碗に持つて來て、

節用集(丁) 不分、子タイカナ、 異、アヤシヒカナ、

てまゐる衆もござり、又、辛いをすく衆もござる。

伊曾保物語、なまぬるい湯を、一杯、大茶碗に持つて来て、

節用集(丁) 不分、チタイカナ、異、アヤシヒカナ、

### 江戸時代

昨日は今日の物語、世にはあぶない事がおほい。」さてく、かたじけない事かな。

徒然草抄上、ヲモヒツキ無イ也。

醒睡笑五、それほどくるしいさけを、よいころにのみもせで、同六、味は、あまいか、すいか、と問ふ。

犬子集春上、住吉の、まつたい物ぞ、わかみどり。「道風に、うごくやふるい、筆の花。同五、秋下、山の腰の、枝珊瑚樹か、こい紅葉。

吾吟我集二、夏、蟬ころも、たゞ一重にて、なく聲や、布施ない經に、けさ落すらん。

新增、犬筑波集、雑、あめの魚、いざ立寄て、みてゆかん、築おもしろい、五月雨の中。

正章千句八、なせに今夜の、月はおそいぞ。

東海道名所記、赤坂、宿毎に遊女あり、立並びて、旅人を留む、云々、なふく、

【一六一】 形容詞の連體形の「きしき」の「しい」となつたもの

馬かたどの、こゝへおろしまさせられ、さきには、よい宿はないに。

諸國盆踊唱歌、武藏、わかいをなごの、とごのないは、笠にしめ緒の、ない

如く。同、美作、またとゆくまい、湯原のゆへは、三坂三里が、ういほどに。

後撰夷曲集、五、君が世は、ながい菖蒲と、軒口に、さして變らぬ、嘉例めでたし。同、六、みても三穗の、景にはあらぬ、心をば、あとにおきつゝ、旅はうい物。

西翁十百韻獨吟、立年の、かしらもかたい、翁かな。同、岩城にて、色に出る、盆かたびらの、こいあさぎ。

狂歌鳩杖集、大阪へ、やがてこいと、の地黄煎、あまいことばに、ちよいとのる船。

雑兵物語、下、夫丸、暑いも、寒いも、ひだるい時も、ねむたい時も、からだの持様は、おれ程は、中々、おしりなさるまい。

○福岡縣、熊本縣、肥前で、わ、形容詞の終止形連體形を、「好か」「長か」「嬉しか」など、云う、「好かり」「長かる」「等の略である。

【一六五】又、形容詞の第二活用形に、「ば」を附けて、「それでよくば」「それにしろい

そがしくば」「後に話そう長くば」「切ろう無くば」「仕方がない直が高くば」「買

、云う「好かり長かる、等の略である。

【一六五】又、形容詞の第二活用形に「ば」を附けて、「それでよくばそれにしろい

そがしくば後に話そう長くば切ろう無くば仕方がない直が高くば買  
わぬなど、も云うことがあつて、「よければいそがしければ」など、云う  
と同じ意である、これわ、文語の格の残つて居るのであるが、文語でわ、よ  
くば「いそがしくば」わ、將然の意味で、「よければいそがしければ」わ、已然の  
意味で、區別があるけれども、口語でわ、區別なく用いる、しかし、「くば」わ、今  
わ、多くわ用いない。

○又「よければ」こそ取つたのである「新しければ」こそ買つたのだなど云う時  
わ、「よいから」よいに因つて「新しいから」新しいに因て「の意味となる。

「無ければならぬ」を「なけねばならぬ」など、云う人もあるが、形容詞に、打消  
の助動詞の「ずぬね」わつゝかぬから、間違つて居る、又「なけらねばならぬ」な  
から「ねばならぬ」など、云うわ、いよく誤である。

【一六七】此末の「な」わ、文語の「なら」なり「なる」なれ」と活用する指定の助動  
詞の連體形の「なる」の「る」の無くなつたものである、其委しいことわ、助詞の（三  
八六）の「なら」の條に云う、

是等の「な」の附いたものを、一語と見る時わ、一々、辭書に擧げねばならぬ、美

【一六七】形容詞 靜かな 立派な 綺麗な

事「あわれ」立派「結構」綺麗などを舉げて、又、更に、「美事な」あわれな「立派な」結構な「綺麗な」など、一々舉げる時わ、辭書の煩わしき限りがない、因て、舊案にわ、「な」を別に助詞に立て、形容詞の連體形のようなものを形作らせるものとしたけれども、特別委員會で、本書のように、「な」の附いたものを、一語として立てられたのである。

○動詞の終止形わ、古くわ、花落つ「家を建つ」旅立をすであるに、後にわ、落つる「建つる」する「と」る「が」附くようになつたが、これと反對に、口語でわ、助動詞の終止形の「静なり」急なり「聞きたり」見たり「の」りが落ちて「静かな」急な「聞いた」見た「となり、連體形の「静かなる」夜急なる事「聞きたる」聲見たる人「の」る「が」落ちて「静な」夜急な事「聞いた」聲見た人となつたのわ、考究すべき問題である、尙、過去の助動詞の「た」の條と、(三八六)の助詞の「なら」の條とを見合わせよ。

○「なる」の「な」となつたもの、

## 鎌倉時代

藤原隆信朝臣集、廻文、しなだまも、をかしなまひも、ましてしばしてまもひまなし、かをもまたなし。

明月記、寛喜二年、五月二十日、爲家參着の時、突、膝、いかなようゐさまぞと

まなし、かをもまたなし。

明月記、寛喜二年、五月二十日、爲家參着の時、突、膝、いかな||ようゐさまぞと申、又、令、咲、給、之、由、

吾妻鏡、元暦二年、四月十五日、豊田兵衛尉、色ハ白ラカニシテ、顔ハ不覺氣ナモノ、只可候ニ、任官希有也。

徒然草、六二 延政門院（後嵯峨帝皇女）ふたつもじ、牛のつのもじ、すぐなもじ、ゆがみもじとぞ、君はおぼゆる。（こいしくの四字形）

### 南北朝時代

太平記、十五、主上自山門還幸、二筋の中、の白みを、塗りかくし、にたく（似た、新田）しげな||笠符哉。（足利氏の敗兵が、足利氏の紋の、輪の内に二畫ある引兩の中を塗つて、新田氏の紋の、一畫の中なか黒としたのを云つたのである。）

### 室町時代

幸若、入鹿、氷のやうな||劍を抜き、同、敦盛、經盛とやらんも、花のやうな||若君を渚に一人殘しおき、

史記抄、六、二二 胡亂ナ事ヲ云トテ、トラヨウトシタレバ、同、七、三一 我

【二六七】

形容詞

靜かな

立派な

綺麗な

ガ不明ナニヨツテ、心得バシチガウタカ。同、八、三 異ナ事ヲ云テ、「奇特ナ事ナリ。同、十四、七二 此類ナ様ナ事ヲ、循吏トハ云ゾ。

孟子抄、一、三 秦ハ、ヨコナ國、六國ハ、タテナ國ゾ。同、一、四 陵遲ハ、ヲカノ

次第崩レニシテ、平地ニナリサウナヲ云ゾ。同、一、三〇 襄王ノ體ハ、何

共、聊爾ナ人デ、人君トモ見ヘヌ人ヂヤソ。

守武千句、 おくびやうさうな、峯のたいしやう。

元龜字叢、 論、オフキナメ、

狂言記、鞞猿、 なう、そこな人、そのやうな無體な事は言はぬものぢや。」

さてく、利根な物ぢや。同、吃、 さてく、氣の毒な事ぢや。同、宗論、

幸な事でござる。同、釣狐、 眞黒なちさい形をして、同、素襖落、 餘り

急な事でござる。「あの様な結構な御方、

伊曾保物語、 異形不思議な人體、兵糧を入れた大きな荷があつたを、

江戸時代

徒然草抄、上、 吾ト云事ヲ、ワト一字ニテ、ワガミト云ヤウナ事ゾ。同、下、

繩床、坐禪工夫ノ床也、繩ヲ以テ作りタルソサウナ床也。

醒睡笑、一、 そのやうな事を、高く言はぬ物ぞ。同、七、 勿怪な事には、氣が

短慮に、

徒然草抄、上、吾ト云事ヲ、ワト一字ニテ、ワガミト云ヤウナ事ゾ。同、下、  
繩床、坐禪工夫ノ床也、繩ヲ以テ作リタルソサウナ床也。

醒睡笑、一、そのやうな事を、高く言はぬ物ぞ。同、七、勿怪な事には、氣が  
短慮に、

犬子集、一、春、上、正直な、梅の立えや、神ごゝろ。同、十四、雜、上、平治のみだ  
れ、いやな世中。

油糟、雜、やはらかならつこの皮を、なでゝみて、玉礪の、繪にけつかうな、表  
紙して、あはれなは、淨飯王の、崩御にて、りこうな駒に、のりてもどれり。  
いむぎんな、病者が人に、みまはれて、あらたなは、金のみたけの、罰利生。

正章千句、一、鶯、優な姫を、うへ人達や、戀の歌、同、二、馬かたは、みな五調  
な、生れ性、もつけな顔を、するが牧溪。見事なは、山の月より、水の月。  
露滑かな、紙のうちやう。同、三、蝦、不審な雲の、たゝる野の末。同、五、  
黒坊は、うらゝな日より、悦びて、同、六、七夕、晴やかな、峠の景に、しくは  
なし。同、九、初冬、落葉、きくも殊勝な、初祖菩提心。

吾吟我集、九、竹、不孝なる、人に見せばや、若竹の、すぐな心の、ふしのあひだを。  
東海道名所記、江戸より大磯、生れつき、花車なもあり、いやしきもあり。

同、薩埵峠、ふたらくな、道になりけり、薩埵山、これ觀音の、御利生ぞかし。

【一六七】

形容詞

靜かな

立派な

綺麗な

一九七